

麦作期間中における緩効性肥料の溶出の予測方法

1 背景・目的

県内の大麦生産の施肥体系は、基肥一発肥料が広く普及しているが、暖冬年には、春季に窒素供給不足になる恐れがある。現在は生育量に応じて、越冬後に上乗せ追肥を行っているが、緩効性肥料の窒素成分がどれだけ溶出しているかを確かめる手段が無い。そこで麦作期間中における緩効性肥料の溶出率を精度よく予測できる手法を確立する。

2 技術のポイント

- (1) LP40 及び LPS30 の溶出率と施肥日からの積算温度を用いて、溶出率を推定する予測式を作成した(図1,2)。
- (2) (1)の式を用いると、施肥日からの積算温度から、生育期間中の大麦用全量基肥肥料の緩効性成分の溶出率を予測できる。
- (3) (1)の式を用いて、暖冬年・寒冬年・平年並の年にそれぞれあてはめ、各生育ステージの溶出量を算出すると、どの年においても特に消雪期の溶出が不足し、追肥が必要であることが明らかとなった(図3)。

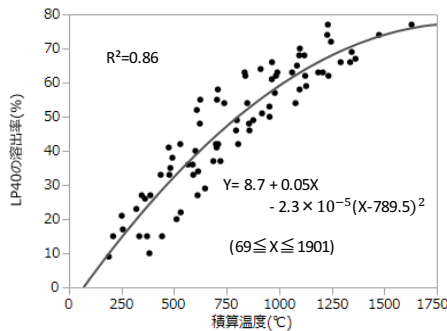


図1 LP40の溶出率と積算温度

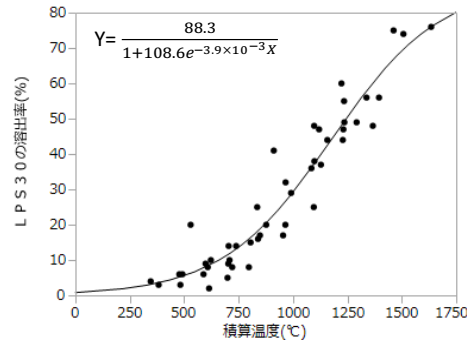


図2 LPS30の溶出率と積算温度

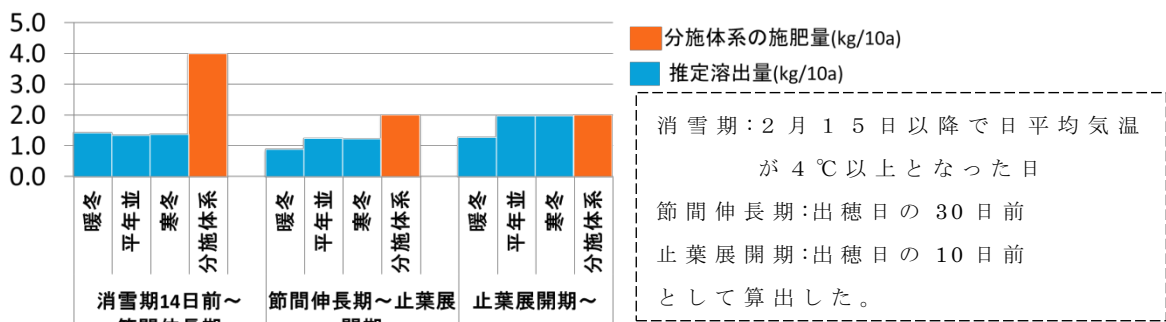


図3 冬期間の気温別・生育ステージ別の緩効性肥料(LP40+LPS30)の溶出量

3 成果の活用と残された問題点

- (1) 上乗せ追肥の要不要の判断は、生育量も踏まえた上で行う。
- (2) 予測のための気象データは金沢地方気象台の平均値を利用している。

問合先：育種グループ TEL076-257-6944
 担当者：松谷瑛、猪野雅哉